
スウィートＬＯＶＥバレンタイン

桜草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スワイートLOVEバレンタイン

【著者名】

Nコード

N6575D

【あらすじ】

バレンタインウィークの連載です。コナン×蘭、佐藤×高木、歩美「コナン、平次×和葉、コナン×哀、新一×蘭のカツプリングの各短編を中心に連載しています。（一度、何回も同じ話が投稿されたエラーがありました。《泣》）迷惑をおかけしました！

AM 6:00

朝起きると、陽射しがカーテンにつばにに溢れていた。
時間はもう朝だ。

おっちゃんはまだ寝ている。

えっと・・・今日、何日だつけ・・・

カレンダーを見ようとした瞬間、蘭が駆け込んできた。

「おはよー。」^ノナン君。今日は何の日だか知つてるー?」

「あ・・・バレンタイン・・・。」

「わ~うそつ、当たりーーー!」

必要以上にのりに乗つてる蘭を見て、少し呆れてしまつた。
バレンタインってそんなにいいもんかよ・・・。

確か工藤新一の時の高一では、『れつと靴箱から溢れるくらじもりつた。』

それから一週間、蘭にはジト田で見られて結構大変だったんだぞ・・・!

ま、いつも蘭がくれるのは・・・『幼なじみ』としての義理チョコだつたけど・・・。

「はい、これヤイバー チョコー。『ナン君ほしがつてたよね?』

「あ、うん・・・。ありがと、蘭姉ちゃん。」

仮面ヤイバーがでっかく写っている箱を見る。

ハア・・・小学生の俺にはこんなけつたいたなお菓子か・・・。

早く大人に戻りてえ・・・

「『ナン君はモテるから、チョコレートたくさん貰つて来ちゃうよね!』

その言葉から去年のバレンタイン、蘭に言われた冷たい言葉を思い出す。

『新一はモテるから、チョコレートはたくさん貰うんでしょ?』

何で今年だけ、チョコレートをくれないのかと聞いた時だ。

今思つと・・・本命チョコレート以外やらないという、蘭の決意だ

つたかもしれない。

照れて渡せなかつたのかも・・・

じゃあその時は・・・蘭は・・・俺のことを・・・。

「どうしたの、コナン君? 顔赤いよ・・・熱でもあるの?..」

「なつ何でもないよ!..じゃあ僕、学校行く準備しちゃうね。」

あわただしい朝。今日はバレンタイン。

A M 8 : 0 0

「ちょ、ちょっと何なのよこれへー！」

2月14日、警視庁捜査一課は今日もあわただしいスタートだった。

一課のアイドルの佐藤美和子は『男よりもかつこいい』。
なので美和子ファンのオジサンたちだけではなく、女にもチョコレートを貰う。

なので来た時は机の上が、チョコでいっぱいになっていたのだ。

「ちょっと高木君、このチョコを集めるの手伝ってくれる？大変なんだからー！」

「あ、はい」

自分が呼ばれてつられて返事を言ひ。
チョコレートは結構な量があつた。

それでも仕事が始まる前に、集め終えた。

「あらがと、高木君！」

「いえいえ！えっとその……れど……」

「あー白鳥君ーこれ義理チョコーいつも貰つてばかりで悪いしねー！」

「いえ……僕の気持ちですから……（結局義理ですか……）」

わざと彼女は用がすんだとばかりに、仕事場へ行ってしまった。

ちよつと佐藤さんーまさか僕のチョコはないんですね！

あれ？俺なんか悪いことしたっけ？…ちゃんとカラオケも付き合つてるし…
悪いことした覚えはないんだけど…

…はあー去年みたいに…由美さんの義理チョコだけが
貰つてこよ…

「あー高木君ーこれこれ、デパートで買つてきた義理チョコー感謝してねー！」

「あ、はい…。」

何かへこんでいるようだ。直接、用件を聞いてみる。

「何落ち込んでるのよーで？ 美和子からは？」

「え・・・いや何も貰つてませんけど・・・。」

「嘘ーあーまた何かやらかしたわね？」

「そうみたいですね・・・。」

あれ？ おつかしいわね・・・。

美和子張り切つてチョコ作つてたのになあ・・・。

「ま、いいですよ・・・どーセバレンタインなんて、自分でチョコ作つて食べればいいんですから！」

「つたぐ・・・現実的ねー。はいはい、勝手に一人で怒つてなさいよー。」

「・・・いや、怒つてなんかいませんけど・・・ハア・・・・。」

だいぶ落ち込み気味だ。

さつやと追い出して、美和子のところへ。

「・・・何?」

「何つてもうー愛想が悪いわねーちよつと聞きたい事があるんだけ
どぞー」

「友チョコならもつ渡したはずよね?」

何?」まかしてんのよ美和子!
私にはバレバレよー

「せうじやなくてー何で高木君にチョコあげないのかって聞いている
のー」

「・・・。」

顔色が変わった。
明らかに動搖している。

あれ・・・なんかヤバイ」と呟ついた?

「失敗しちゃったから・・・」

「え?」

「せ、せっかく手作りチョコ作ろうとしたのよ……なのに砂糖と塩を間違えて入れちゃって…うつかりよーうつかり！」

真っ赤になつて言いまぐる美和子はさすがに迫力ある～！

[写メ取りたいくらい・・・・・！]

「・・・なーんだ、そんな事？だつたら適当に買えばいいんじゃないの？」

「そういう分けにはいかないでしょ……だつて……。」

「だつて何よ？」

問い合わせてみる。

冷静な美和子の対策は、『高木君を使ひ」と。

「分かつたわよーもつ・・・適当に買つてきて適当にあげればいいんでしょ！」

あげたくないわけじゃないんだからー。」

まったく・・・いい加減素直になりなさいよ・・・
失敗したのだけ、高木君はきっと大喜びするはずよ。

苦い朝。今日はバレンタイン。

AM 9:00

「コナン君ー私のチャーチカードあげるー。」

「あーゾルイー！アタシもよーー。」

あーあ。せっぱつコナン君はもういるなあ・・・。
歩美も一生懸命作ってきたのこーーこつあがみつ・・・。

窓際でしつかりと見つめる。

田の前の彼を見てそう思つ。

周囲には女の子たちが群がつていた。

とてもじゅないナビ渡す暇なんてない。

「畠田さん？」

「わあ寝ちゃんー。びっくりしたあ。」

「畠田さん彼に渡すなこのー。」

彼女の言葉にドキッとした自分に焦る。

「そうだ・・・急がなきや・・・早くコナン君に渡さないと・・・。

「ハハうんー、そりだね・・・。ねえ哀ちゃんはコナン君に渡さないの?」

「え?」

「コナン君の」と・・・ビビり想つてゐるの?」

顔を逸らす彼女を見つめる。

流れる赤みがかかった茶髪、切れ長だが大きい瞳、どこか寂しそうな表情。

物凄く綺麗・・・。

「別に江戸川君の」とは、仲間である」と以外なんとも思つてないわよ。」

「哀ちゃん・・・本当にそういうなの?」

「ええ・・・安心して。誰もあなたの彼なんか取らないわ・・・。」

真っ赤になつたのは自分でも分かる。

「私はあなたの」とを応援するわ。」

気持ちがフツと楽になる。

静かに笑つて正面を見てくる親友に、精一杯笑つた。

「ありがとー哀ちゃん!」

「そんなことより、早く彼に渡しちゃいなさいよ。他の人にとられてもいいの?」

「やつやだー歩美、負けない!」

相変わらず女の子たちに囲まれて居る、彼の方へ行く。

「コナン君ーいつもありがとーこれ、歩美からのチョコだよー。」

「ああ、ありがとう歩美ちゃん。」

コナン君・・・笑つてくれた・・・。

歩美のチョコが一番おいしいんだからっ！

大好きだからね、コナン君！

明るい朝。今日はバレンタイン。

PM3:00

「和葉～！服部にはチヨコ渡したん？」

「なつ何言つととの、香奈！まだに決まつてゐやん！」

放課後、同じ合氣道部の香奈に痛いところをつかれた。
アタシ・・・まだ平次にチヨコ渡してないんや・・・。
毎年、毎年チヨコレートを渡していくので馴れっこのはずだけビ・・・。

合氣道の部活の最中、先輩の松山さんと話しかけられた。

「なあ遠山、本命と違つてええからバレンタインにチヨコくれへんか？」

「へ？……でも……。」

「やつぱつ服部だけにしかあげられないんやな？」

「なつ何言つどゐるですかつ……そんなわけあつませんーいつもお世話になつとるし、先輩にチヨン作つてきますー。」

・・・そんなわけで先輩にチヨン作つてくれることになつてしまつた。
まあ毎年、合氣道部の人たちには義理チヨンあげとるし・・・かまわへんよね？

あつと・・・

「やつぱつ今年は本命？本命なん、和葉あ」

「・・・出来れば・・・やつぱつその方がええと想つたが・・・」

先輩にチヨンあげるんやもん。

本命以外あげないやつと、あげる奴に悪いし・・・

やつぱり今年も、幼なじみとしてのチヨンあげるしかないんかなあ・・・。

平次、やつぱりモテてチョコたくさん貰つたらしいねん。

そんなかには、転校して来たごつつかわええ女の子もいるらしい。・。
・。

「よう和葉ー。こんな感じにならした?」

合氣道の帰り、幼なじみの色黒男とバッタリ出会つた。
・・・と言つてもアタシが、ずっと待つてたんやけど。

「別に。合氣道部の松山さんとチョコあげるからまつとるだけや。

「・・・え?」

和葉が? わざわざ待つてチョコあげるやと?

「平次? どないしたの?」

「いっいや～何でもないわ！…そつかあげるんか！…おめでたいわ！ほ
な、がんばってなあ！」

言葉が空回りする。

動搖してこむ自分に『気がついた』。

・・・なんや。

ビリの馬の骨が分からん先輩にあげるやと？

嫉妬心。

自分で『気がついてやらに焦つた』。

「アホ！…義理やで、義理！」

「何や・・・本命とちがうんか・・・だつたら・・・。」

「・・・え？」

「俺以外の奴に、あげるなや・・・」

「・・・・・」

顔が紅潮していることに気がついた。
慌てて顔を振り、『まかす。

「いやいや、べつ別に深い意味はないで！！本命以外はあげるなや
つて意味や！」

その・・・俺は幼なじみやからなあー貰つて当然やし・・・な！」

「あつ当たり前やん！はい、チヨ！」

義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・義理・

呪いのよひリボンには、『義理』といづ文字が書かれていた。

「何やこれは……」んなふざけたチヨ「貰いとうないわ！ボケ！」

「なんやとー推理アホにはじょつビデオをわー！」

ずっと一人で追いかけていた。

その日和葉は・・・やはり平次にしかチヨコレートは渡さなかつた。

愉快な放課後。今日はバレンタイン。

heini / kanuha (後書き)

作者の桜草です。

この話では初めての後書きですね！

本来ならばバレンタインで完結させるはずの話でしたが・・・間に
あいませんでした（泣）

ですのでバレンタインウィーク（バレンタインから7日間）までに
完結させたいと思います！

バレンタインの日・・・自分は、必要以上に男っぽいので自分では
あげずに、友達から結構チヨコ貰いましたよ・・・。
男よりカッコイイという理由で・・・（ネタにしましたが
こつ見えても女なんですけど！

ついてことでまた次回！

（たくさんさんの小説が投稿されていた事は、Hリーです《汗》迷惑
をおかけしました。）

「よし、修理は完了じゃーこれで通常通りましたー。」

俺は、博士の家でスケボーの修理をしてもらっていた。
当然あいつも田に入つてくる。

修理には少しも興味がないようだ、確かに田をやっている。

切れ長の眼が、じらりと向いた。

「あい・・・名探偵さんは小さくなつてもモテるのね。」

彼女がそういったのは、机の上にある大量のチョコを見たせいであ
る。

「バー口悪いからよ・・・ヒロシだ灰原。」

「・・・何?」

「お前はチョコ・・・いや何でもない」

言いかけてやめた。

お前はチョコ、あげたことあるのか?

答えは聞かなくても分かってる。

『馬鹿ね・・・そんな事あるわけないでしょ?』

ハ・・・当たり前だよな・・・

有り得ないことを聞いて、何かを期待してたのか?
自分自身でも分からない。
近頃・・・自分はきっと変だ。

そう感じる。

「あ・・・学校に忘れ物しちゃったわ・・・江戸川君、付き合つてくれる?」

「はあ?何で俺が?」

「女がこんな真夜中、一人で外歩くなんて物騒でしょ・・・。」

切れ長の瞳がジッと俺を見る。

恐い・・・

とても断りきれなかつたので、一緒に学校へ行く事にした。

やつぱり夜中は寒い。

「一いつつ、持ってきたほうが良かったかな……。

「こんな真夜中だから……幽霊くじこ出してもおかしくねーよ
な?」

「あら・・・変質者の方が出てきたくな……。」

「・・・・」

とても男女の会話とは思えない。

・・・もつと夢のある話へじりこしたつてこいじやねーか。

そんなに俺のこと、嫌いかよ。

「なあ灰原、忘れ物つて何?」

「・・・まあ?当てる?」

お~お~い・・・まさか薬・・・とかじやねーだろな?

何だかんだ言つている間に、学校へ着いてしまった。
さすがに真夜中のバレンタインデー。警備員は、居なかつた。

「ちゅうと待つてなさいよ。取つて来るから。」

「いい。俺も着いてくる。」

「・・・勝手にして。」

・・・最近、ずっとそうだ。

あまりにも灰原は俺に對して、冷たい。
何か悪いことしたか？

星空を見上げる。

永遠にここに居られるような気がした。

どれくらい待つていただろうか。

「工藤君、大丈夫？持つてきたわよ。」

「え？あ、ああ。」

ぼーっとしていた。

眠っていたような気もした。

「・・・で、何もつて来たんだ?」

「あ、ちょー!」

ドサッ

薄いピンク色の箱に、赤いリボン。
手のひらサイズの小さな箱。

・・・え?

「はーー!」

「え? なつ何だよ?」

「だからー!」これ・・・バレンタインの・・・その、彼方にあげよう
かと思つて・・・

学校に忘れてきちゃつたから・・・。

嘘だろ・・・？

灰原が、俺に・・・チョコを？

普段のそつけない冷たい態度から見て、嫌われていると思つてた。

ましてやこんな・・・

「一つ言つておくけど、義理よギ・リー！勘違いしないでよね！」

「・・・ああ、分かつてゐる。ありがとう灰原。」

「わっ分かればいいのよ・・・。」

怒つているのが、彼女の頬は赤く紅潮していた。
義理でも・・・俺のことを思つて作ってくれたのは確かだ。

自分のために、自らを犠牲にしようとすること・・・

彼女の優しさが、思いがけず頭に蘇つてきた。

もし・・・もしもだ。

俺の中の『江戸川コナン』が存在しなくて……ただの小学生の……

『江戸川コナン』だったら……俺は……。

『守ってくれるんでしょう?』

「……どうしたのよ江戸川君。」

フツと微笑み、星空を仰いだ。

「いや……何でもない。」

大切な人を、守りたい。

工藤新一でも江戸川コナンでも・・・

ずっと見つめていた。

二人で・・・。

切ない夜に。今日はバレンタイン。

作者の桜草です。

何やらエラーですよ、エラー……。

平次×和葉の部分がたくさん投稿されていました！？
(投稿完了画面が出なくて焦って何回も投稿してしまい……)

不具合があったそうで、直してくれるようですが

良かった……。

たくさんの読者様にご迷惑をおかけしました。
お詫び申し上げます。

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6575d/>

スウィートLOVEバレンタイン

2010年10月10日18時23分発行